

Title	伯林近信
Sub Title	
Author	阿部, 秀助
Publisher	三田学会
Publication year	1910
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.4, No.6 (1910. 12) ,p.733(129)- 734(130)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19101200-0129

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

主張し、多數者の誤れる意見に對して其權威を保障し政府を堅固に武装せんとする國家的觀念は常に存在せり、……之に對峙するは社會的思想にして是は國家を以て社會の文化を全うせしむる方便手段と見做し、各社會的勢力は其意思を發表し遂行し得る所の容易に動かし得る所の憲法を要望す……此の極端なる二個の觀念は共に等分の眞理と偏頗とを有せり、前者は國家を上より觀察す從つて治者の觀念なり、之に反して後者は國家を下より觀察す從つて是れ被治者の思想なり、并し治者被治者の對立は以て政黨組織の動力と云ふべからず又全然社會的性質を帯びず獨り國家意思の統一を要望する嚴格なる意義に於ける政黨は決して存在す可からざる也、唯夫れ政治的國家觀と今日の所謂保守黨との間、又社會的國家觀と所謂進歩黨との間に極めて密接の關係あり、蓋し社會は常に國家よりも迅速に動搖し新思想新經濟的勢力は國家の之を承認領解するに先ちて先づ鞏固なる勢力とならざる可からず左れば何れの政府も統治する

が故に保守的性質を帯ふるなり」云々 (a.d.O.s. 587-8)

而して彼は遂に斷言すらく、

「國家の權威と人民の自由、統一と個體階級的精神と經濟的利害總べて是等無數の政治的社會的生活の反對矛盾は互に相交錯し相關聯して以て絶えず新政黨の組成を促すものなり」と (a.d.O.s. 589)

要之ト氏は英國の議院制度政黨政治を以て全く英國の特殊の事情に胚胎し、アングロサクソン民族特有の精神の發顯に外ならずとし、從つて之を模倣し之を獨逸に移入するの妄且つ愚、無謀且つ不可能なるを斷言せるものにして、其炯々たる歴史眼其の鋭利なる論鋒は吾人の敬服して措かざる所なり。

伯林近信

阿 部 秀 助

會員諸君

スプレー河畔の風光、轉々蕭條たるものありと雖、然かも人爲的活動を以て勝る當地は、今も尙ほ小生が來伯當時に異ならず、賑かさを呈し候、當地は研究の機關最も善く完備し、生活必需品(當地及埃都維也納に於ける肉類問題は既に新紙上にて御承知のこと、存候、既に後者にては此處を防ぐ爲め、最近南米アルゼンチンより冷肉を輸入し好結果を見候)及勞力(小生の寓居に於ける下女一人一ヶ月の手當四十圓に有之候)を除きては諸物價左迄東京と異ならず、否な或物(洋物)の如きは遙かに廉價に有之候、小生は自己研究の主題たる「企業の見地より觀たる中世史及近世史」と二三理論方面に關する研究材料を蒐集する爲、毎日當地の王立圖書館及伯林大學附屬圖書館の厄介と相成候、小生は是等の研究の爲め來年十二月迄當地滞在の豫定に候もつとも來年夏期二三ヶ月間は南獨にて専ら「アウグスブルヒ」「ウルム」「ニュルンベルヒ」「ローテンブルグ」「ストラスブルグ」「フランクフルト、アム、マイン」等の諸市、北獨逸にて「ヒルデスハイム」等を實地調査し、明後年春更に埃都維也納を経て伊太利に下り専ら「ベニス」「フロレンス」「ゼノア」「アマルツ」等を實地調査し、更に南獨と伊太利の中間地たる瑞西の交通路(主として中世近世の初期)を踏査して一先づ伯林に歸り、更に同年四月和蘭、白耳義を

經て英國に渡り堀江教授が研究せられし「ゴールドスミス、ライブラリー」にて「英國に於ける近世資本主義の發展史」を研究致、それより歸路に就く豫定に候、若幸に金と時とを有せば更に「ロイド」の汽船に乗じて裏海方面、小亞細亞、土耳其方面を遊遊し、

中世に於けるレバント商業の狀態に考察致度存候。
小生は研究上の便利の爲め本月上旬伯林大學に入學仕候、入學宣誓式は極めて嚴肅にて「シユミット」總長自から握手せられ候節は小生は少からず學問上に對する自己の信念を高め候、同大學百年祭はなかく盛大にて小生は三千の學生と共に炬火行列の中に入りて面白く一夕をおくり候、當冬期は「シユモラー」教授に就き候(同教授の講義は極めて明快にて聞き易き、尙ほ同教授の國民經濟原論に見るが如き、*Night's life*の感有之候)、及伯林高等商業學校にて「ツムバルト」教授の經濟史を聽講致候兩教授の學說に對しては、小生は少からざる疑問と史的反證とを有し候、此機會を利用して自己の疑問を解決致度存候、蓋、最近の歴史派が如何に史的事實を濫用し、曲解せることは誰人も異論なき處と信じ候。

獨逸史學の將來に關しては天才の出現せざる限り、左迄恐るゝに足らずと信候、所謂政治的現象なるものが史學研究上の對象たりし時に於てこそ著しき進歩發達をなせしも、然かも一度政治の範圍を脱して、或は世界史となり、或は文化史となり、更に史學の理論的構成となるに至りて、彼等は自己の研究法を改めざる可からざるに至り、其研究法を改むると共に、其内容の貧弱なるを感ず

るに至れり、之れ實に最近「ランプレヒト」教授の *Königlich-Saehsische Institut* のよりて生ぜし所以と存候 (Prof. Lamprecht, *historische Methode u. historische akademische Unterrichts u. Diologie* 43 参照) 又た柏林大學の「ブライシヒ」教授の人類史の如き著想は甚だよきも、*Historische* に終るものにあらずやと疑ふ者に候。

之れに反して日本に於ける史學は其研究の方法にして宜しきを得ば、極めて有望なる將來を有するものと存候、若夫れ日本史學の將來に就きては小生多少信ずる處有之、歸來諸君の前に自己の管見を述べて御批評を乞ふ存候。

日本の如き新進の學術國に於て、必要なるものは、戦場の功名者にあらずして、寧ろ戦場の犠牲者に有之候、不肖、生が如きもの既に日露の戦役に於て死す可き身なり、餘命を今日に全ふするは之れ天の賜なり、余は此一事を回想する毎に感慨の念、胸に充つるを覺ゆ、希くは餘命のあらん限り、日本に於ける著實なる史風の犠牲者となり、後援者となりて研究に従事致度存候。

美しき事業の下には常に協力の精神存す、我徒四千の師弟心を一にして、塾長を助け、日本の慶應義塾をして更に世界の慶應義塾たらしめざる可からずと存候。

遠く離れて祖國の現状を觀察すれば、實際の政策に於て、果た理想上の傾向に於て多く論ず可きもの有之候、只だ讀む可き書の多くして、月日の経過し易きこと眞に人生の一大憾事に有之候遙かに諸君の御健康を祈る (十月廿五日柏林にて)

新 著 紹 介

The Political History of England
Edited by W. Hunt and R. I. Poole.

九百五年に初めて第十冊を公にしたる本書は去る九月第六冊の發行と共に漸く完結したる。統計十二冊何れも専門史家の筆に成れるものなれば、今後少くも數十年間は英國史のオツソリチーとして推稱さるゝならん、毎冊詳細なる書史を掲げ地圖系圖附表を添え目錄は年表體につくり且索引をも附しあれば参考書としては先づ以て申分なし。否参考書として有益なるのみか、概してリイダブルなれば、英國史に興味を有する人は一部を書齋に備ふ可し、發行書肆ロングマンズグリーン會社は本年中は豫約直段にて發賣す可しとのことなり。本書は或點より見ればケムブリッジ大學同人の事業と目す可き近世史に對する牛津大學出身者の事業とも見做す可く、編輯主任、ハント氏は王立史

學會々長にして曾て牛津に教鞭を執り、レーン、プール氏は同大學に於て古文書學を講じつゝあり尤も第二冊はエールのアダムス教授の筆に成れどその他の寄稿者は殆んど牛津大學に於て史學を修めたるものゝみなりと云ふも不可なし。ハント氏は第十冊を同大學近世史教授オーマン氏は第四冊を著し又、第六冊を起稿せるボラード教授、第七冊を執筆せるモンテীগ教授は、共に余が倫敦なるユニヴァーシティカレッジに於て教を受けたる恩師なるが、何れも牛津大學出なり、ボラード教授にはヘンリ八世之傳、近世史之要素等の傑作ありモンテীগ教授の英國憲法史は簡單にして能くその要を得たり第一冊の著者ホツジキン氏は倫敦なるユニヴァーシティ、カレッジの出身なるが、伊太利入寇史の大作は夙に史學界に名聲を高くし、千六十六年以前の英國史の選述は實にその最も得意とする所なり、第十二冊女王ヴィクトリア治世史の著者シドニー、ロー氏は政論家として世に知られ、スタンダード紙上に數ば健筆を振へり。その筆端

時に保守黨の爲にするが如きの嫌なきにあらねどハーバートポールの近世英國史の自由黨最負の如く甚しからず、マツカーシーの現代史の逸事的なるに満足せざる人にはこのシドニー、ロー氏の書を薦むるを得ん。その他マンチエスター大學のツート教授は第三冊を牛津の講師フィッシャー氏は第五冊をエデンバラのロツジ教授は第八冊を牛津のレダム氏は第九冊を牛津マートンカレッジ院長故ブロードリック氏は第十一冊を著し、リングアード英國史發行以後八十年にして、この英國政治史は完結せり、而して題して政治史と云ふも、宗教、學藝、經濟、社會等に關する事件の發展を等閑視せるにはあらず、唯政治上の現象に重きを置けるのみ。(田中萃一郎)

三 田 學 會 記 事

三 田 文 學 會 大 會

三田文學會秋期講演大會は十一月廿四日午後一時より慶應義塾大